

# 福澤研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第32号 2020年4月30日 発行

## 目次

* 福澤諭吉著『増訂華英通語』原本の確認 (高木不二).....	2・3	* 小幡甚三郎のアメリカ留学を追いかけて (西沢直子).....	8・9
* 小幡篤次郎の人物像と著作の特徴 (住田孝太郎) ...	4	* 新中津市学校との共同事業報告.....	9
* 『小幡篤次郎著作集』の編纂について (西沢直子) ...	5	* 主な動き.....	10
* 福澤諭吉記念慶應義塾史展示館の開設準備状況 (横山寛).....	6・7	* センター諸記録 (2019年10月～2020年3月) .....	11
		* スタッフ一覧.....	12

## 福澤諭吉から渋沢栄一へ



福澤諭吉が1万円札の肖像に登場したのは、昭和59(1984)年のことである。ちょうど35年が過ぎた昨年4月、2024年上半期を目途に、1万円札の肖像は渋沢栄一に変わることが発表された。奇しくも、有泉學氏より福澤から渋沢に送られた書簡の寄贈を受けたので、ここに写真を掲げ、紹介する。

福澤と渋沢の最初の出会いは、明治3(1870)年東京築地の大隈重信邸であったという(石河幹明『福澤諭吉伝』第3巻)。この書簡では、福澤が慶應義塾で学んだ高木怡荘なる人物を渋沢に紹介し、面会してくれるよう依頼している。高木は熊本の出身で、明治4年10月13日に25歳で入学した。

成績表である『慶應義塾勤惰表』には、明治4年10月から明治7年7月まで記載がある。

書簡の発信年ははっきりしないが、明治12年1月に参議兼大蔵卿だった大隈重信は大蔵省統計課の充実を企図し、福澤は大隈に慶應義塾関係者で統計に関心がある者のリストを「スタチスチックの仲間」として送っている。その中に高木の名があるので、『福澤諭吉書簡集』第2巻(岩波書店、2001年、pp.122～3)では、この書簡の発信年を明治11年ではないかと推測している。明治11年だとすると、渋沢はこの年3月に設立された東京商法会議所の初代会頭を務めていた。

また11年ならば『愛知県史 資料編28』(2000年)に資料番号30として掲載されている「福澤諭吉の林金兵衛説論の件に付報知」によれば、高木はこの時期福澤の意を受けて、愛知県春日井郡に起こった地租改正をめぐる騒動の収拾に動いており、この頃は第3者による金銭的介入を模索している時期にあたる。(西沢)



渋沢栄一宛福澤諭吉書簡 明治11年か12月5日付



## 福沢諭吉著『増訂華英通語』原本の確認

大妻女子大学短期大学部名誉教授 高木不二

私はかつて『福沢諭吉事典』において、福沢諭吉の最初の著作である『増訂華英通語』について次のように書いた。

清国人の子卿が著した『華英通語』という英中対訳単語・会話集に、英語の発音と中国語の訳語の日本語読みとを片仮名でつけた出版物である。

原書は福沢が万延元(1860)年初めて渡米した際に、サンフランシスコの中国人商人から購入したものという(現存せず)。なお原書の中国語は、北京官話ではなく、広東語であるとの考証が、中国語学者から報告されている。

『増訂華英通語』には美濃版2冊本と半紙本の2種類の版本がある。(中略)美濃版の2冊本が最初につくられ、のちに半紙版の1冊本にまとめられたと考えられる。見返しには共に「万延庚申/増訂華英通語/快堂蔵版」(版元の「快堂」は木村芥舟の号)と記されている。

書誌学に疎い私は原本の確認をせず、『福沢諭吉全集』(岩波書店、1958)段階の先学の業績を踏襲するかたちでこう記したのであるが、その後この記述(とくに下線部)は訂正を迫られることになった。

きっかけは『福沢諭吉事典』刊行翌年の2011年であったと思うが、日本英学史学会の例会における国語学者で国立国語研究所名誉所員・国際基督教大学アジア文化研究所顧問の飛田良文氏からの指摘であった。『福沢諭吉事典』には『増訂華英通語』の原本はないことになっているが、これが東北大学の狩野文庫にあることを氏はすでに確認し公表しているという発言であった。私の関心は当時福沢研究から離れたところに向かっていたので、飛田氏の指摘を真正面から受け止めることなく、「狩野文庫」という単語だけを記憶して、その後原本の確認作業を行なわないまま時がすぎた。

ところがふとしたきっかけから原本の『華英通語』が浮上してきた。昨年(2019年)の夏、猛暑襲来をうけて神奈川県立図書館に避難していたとき、たまたまのぞいた書棚のなかに、タイトルに「英華辞典」の文字ついた1冊の本を見とめたのである。それは宮田和子氏の『英華辞典の総合的研究 19世紀を中心として』(白帝社、2010)であった。このなかに東北大学図書館の狩野文庫にある子卿著『華英通語』について詳細な書誌学的考察がなされており、その資料ナンバーも付記されていた。さらに「○福沢範(諭吉)訳『増訂華英通語』(万延元＝

1860)は、本書にカタカナによる英語の発音表記と和訳を加えたものである」との注記もあった。

このときかつての飛田氏の指摘が私の頭によみがえった。私はすかさず福沢研究センターの西沢直子氏に連絡し、東北大学の図書館に連絡をとってもらった。原本調査は、事前に関覧許可が得られていたこともあり、西沢氏の協力もあって順調に運び、この狩野文庫本が咸豊5(1855)年に出版された子卿著協徳堂蔵板の『華英通語』(2冊本)であることを確認することができた。『福沢諭吉全集』の『増訂華英通語』に記された何紫庭の序文とも一致しており、末尾の1855年10月16日の発刊日とその書き方も同一であった。

帰ってからさらに宮田和子氏の著書に導かれて『増訂華英通語』について研究史を詳しく追っていくと、実はこの著書の基になった論文があり、それが飛田氏と共著で書かれていること、そして意外にも飛田氏が2014年に福沢研究センターのワークショップで『増訂華英通語』に関して講演をされていることもわかった。これも西沢氏の手をわずらわしてそのときのレジュメを送っていただいたが、そのタイトルはなんと「福沢諭吉『増訂華英通語』の書誌と原本について」となっていた。内容も、添付資料もふくめてかなり詳細かつ充実したもので、まさに国語学と書誌学による『増訂華英通語』に関する包括的な研究報告といえるものであった。



『増訂華英通語』の原本『華英通語』(1855)  
(東北大学図書館狩野文庫蔵)

以下は飛田良文氏の前掲レジュメの基となっている2つの論文、飛田良文・宮田和子著「十九世紀の英華・英華辞典目録」(佐藤喜代治編『国語論究6 近代語の研究』明治書院、1997)と内田慶市『近代における東西言語文化接触の研究』(関西大学出版部、2001)をおもに取

り上げ、飛田氏の所見をふくめて、その研究成果をまとめたものである。なお詳細な考証や参考文献は省略することをお許しいただきたい。

- ① 『増訂華英通語』の版本としては、美濃版2冊本と半紙1冊本の2種類が存在するが、このうち、美濃版2冊本が初刷り、半紙版1冊本が後刷りである。
- ② 『増訂華英通語』の原本である『華英通語』の版本は4種類確認できる。
 

1855	咸豐乙卯	協徳堂蔵版	上下2巻
1860	咸豐庚申	重訂 西營盤恒茂蔵版	上下2巻
1860	万延庚申	増訂 快蔵堂版	上下2巻
1879	光緒己卯	重訂 蔵文堂印	

 このうち福沢諭吉『増訂華英通語』の原書である可能性があるのは、1855年版と1860年版であるが、この両者を東北大学図書館狩野文庫本(1855)とハーバード大学燕京図書館蔵本(1860)で比較すると、1860年増訂版は1855年版と内容は同じである。
- ③ 今後1855年版と1860年版の間に、同様な内容の版が出現しなければ、1855年版の『華英通語』が福沢諭吉『増訂華英通語』の原書と確定できる。
- ④ 1855年版の『華英通語』には広東方言が多く用いられている。このことは著者の子卿あるいは序文を記した何紫庭なる人物の拠点や出版社の所在が広東(香港)であったことを示唆している。
- ⑤ 『華英通語』は英語を中国語に翻訳した「英中」対訳単語・会話集ではなく、中国語を英語に翻訳した文字通り「華英(中英)」対訳単語・会話集である。
- ⑥ この『華英通語』を福沢諭吉は第1回渡米時にサンフランシスコで購入し、帰国後これを日本語に翻訳した。この翻訳した部分が『増訂華英通語』の「増訂」部分である。
- ⑦ 『福沢諭吉全集』第1巻(岩波書店、1858)所収の『増訂華英通語』は、2巻本のうち上巻は慶應義塾の版本を採用し、下巻は慶應義塾が所蔵してなかったため愛知県西尾市の岩瀬文庫本を基にして作成された。しかし岩瀬本の復刻に際しては、これを慶應義塾所蔵の1冊本とつぎあわせて、誤りのある箇所は差し替えて記載したため、結果として『福沢諭吉全集』版は現実には存在しない『増訂華英通語』を作成してしまった。

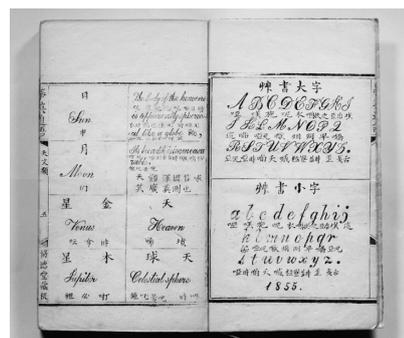
ここで本題にもどり、あらためて今回の原本調査の意義を考えると、『増訂華英通語』の原本とみなしうる東北大学図書館狩野文庫の『華英通語』の所在と基本的な

内容を確認し、この複写を福沢研究センターの資料として収めたことにつける。ただ本稿においては、その報告に加え、筆者自身の反省をふまえて、福沢に関心を持つ諸氏のあいだでひろく知識を共有してもらうために、現段階における書誌学、国語学の分野の『増訂華英通語』あるいは『華英通語』の研究状況を確認・紹介した。

最後に、福沢研究に携わる者として筆者が調査の過程で感じた点を2つほど指摘しておきたい。1つは福沢が帰国後この『増訂華英通語』を驚くべき速さで執筆・出版していることである。彼が『華英通語』を携えてアメリカから帰国したのは万延元(1860)年5月5日、『増訂華英通語』を刊行したのが同年8月である。とすれば原稿は7月には出来上がっていたであろうと考え、わずか2ヶ月余りで翻訳を完成していることになる。扱われている語句や例文の多さを考えると、福沢がこの書にこめた思いの強さを感じざるをえない。

2つは、原本である『華英通語』と、その著者に対する福沢諭吉のリスペクト姿勢である。凡例において福沢は、原本『華英通語』の著者子卿に対して先学として並々ならぬ敬意を示しており、原本の内容や枠組みについても安易に変更することのないよう慎重な姿勢をみせている。さらにいえば、表現形式に関して凡例を漢文で書き、和訳に際しても漢文の訓読法とくに“返り点”を『増訂華英通語』に用いるなど、幕末の段階において、彼が抱いていた中国の知識人や漢字・漢文文化に対する敬愛の念は並大抵ではない。後年文明論者として自らを確立した福沢諭吉が『福沢全集緒言』において示した『増訂華英通語』に対する低い評価を鵜呑みにしてはなるまい。そもそも『華英通語』という本に目を付けたこと自体注目すべきことで、ここにわれわれは福沢諭吉の英学受容におよぼした中国文化の影響の大きさをみるべきではないだろうか。

(公表の時期が前後してしまったが、本稿脱稿後に執筆した拙稿「福沢諭吉著『増訂華英通語』の再検討」(『福沢手帖185』2020年6月)もあわせて参照されたい。)



『華英通語』第5丁(東北大学図書館狩野文庫蔵)



## 小幡篤次郎の人物像と著作の特徴

住 田 孝太郎

同時代人によれば小幡篤次郎の性格は謙虚で温厚、芯の強さと厳しさをあわせもつ人格者であった。明治初年の時代を導いた知識人として世に知られ、漢籍の素養は福沢諭吉をしのぐといわれた。福沢のように知識を広く散ずるよりは、知識を積むことを心がけた学者であり、福沢が様々な事業を図った人物なら、彼はそれらをよく遂行した人物であった。福沢と草創期慶應義塾の思想と活動は彼なしではありえなかった。それは福沢一太郎の文章に明らかである。

「先生(小幡一筆者注)は義塾社中の長老にして、つとに先人諭吉を助けて西洋文明の輸入、後進子弟の教育に全力を注ぎ、およそ先人の事業にして先生のこれにあらずからざるもの少なく、社中の内外を問わず先人と並び称して福沢小幡と云い以てその学徳を推すに至れり。先人の事業にして我日本の文明進歩を裨補したるの功ありとせば、先生は確かにこれを分かすべきの人にして一般社会も永くその恩を記さざるを得ざるべし」(『小幡先生を弔す』『時事新報』明治38年4月18日付)

小幡は多くの分野について著作を遺した。その理由は彼の著作よりも、福沢塾が自発的結社として宣言した『芝新銭座慶應義塾之記』(慶應4年)に見出すことができる。慶應義塾同社の名で記されたこの文章は、洋学を蘭学の伝統上に位置づけた。鎖国により蘭学は限られた分野しか許されずにいた。だが、ペリー来航後に西洋各国と条約を結んだことが西洋の事情に通じる必要を生み、期せずしてあらゆる分野を網羅する洋学が勃興したことを述べている。

西洋の衝撃がもたらした「実務家とファナティクスとが活躍した激動期」(佐藤誠三郎『幕末政治論集』岩波書店、1976年)に、慶應義塾の主だった人々はいずれからも距離をとって学問に専念した(「中元祝酒之記」)。それは逃避ではなく、鋭い政治的リアリズムに基づいた選択だった(藤田省三「維新における福沢の選択」『三田新聞』1964年)。外国と政府の軋轢の間隙に勃興した洋学、統治者と政治運動家の狭間に生まれた結社。動乱の時代に生じた間隙を縫って、彼らは次の時代の担い手となるために備えたのだった。維新が到来して後、福沢や小幡ら草創期慶應義塾の人々による著作のテーマが多岐にわたるのは、新時代の様々な実務の要請によるものに他ならなかった。それらは、「<sup>フナタツキ</sup>乱世的革命」(竹越与三郎『新日本史』中巻、明治25年)の中で旧社会を破壊し、新社会をもたらそうとした彼らの取組みの果実である。彼らが各作品で発した問いと答えは何であったのか、彼らが何に答えて執筆したのかは様々な角度から幾度でも探求

するに値する事柄である。

小幡の著作のテーマが多岐にわたることについて、説明を費やすには理由がある。啓蒙という注意を要する言葉の使用に慎重を期したいのである(河野有理「『啓蒙思想』語りの終わらせかたについて」『政治思想研究』第20号、風行社、2020年5月)。福沢や草創期慶應義塾の思想と活動について啓蒙という語を使用することは妥当だとしても、わかりやすい言葉として了解してしまうと、テキストの持つ豊かな読解可能性は覆い隠されてしまう。では、小幡の著作について特徴を見出せるとしたら、何だろうか。それは共同的思考の成果という点である。

志を共にする人々が始めた慶應義塾の活動が作品上にも共同という形で表れている。小幡の著作には福沢や他の門下生と連名のもの、福沢が序文を寄せたもの、あるいは福沢が作品中で引用したものがある。小幡は他者の著作のために序文も執筆した。これらは福沢を中心としつつ、複数の同志が共通の関心から課題を担ったことを物語る。小幡のテキストを分析すれば、福沢や門下生について知られざる事柄を明らかにすることが期待できる。

著作の概略を紹介しよう。形態としては単行本(翻訳多数)と、新聞・雑誌上の論説に二分できる。今回の著作集では単行本を中心に収録する。分野は博物学・窮理学、日本史についての初等テキストがあり、兵学書もある。政治・経済上の著訳作は、新聞や雑誌の論説として発表されたものが多い。主著をあげるなら『英氏経済論』、『弥児氏宗教三論』となる。前者はF.ウェーランド『経済学』の全訳、後者はJ.S.ミル『宗教三論』(刊行は第二編まで、草稿は第三編まで存在)の翻訳である。小幡の作品については、諸科学の先行研究において紹介されてきたものもある。だがハサン・カマル・ハルブ氏が指摘したように、各専門分野における嚆矢としてのみ紹介された例が多く、内容にまでふみこんで検討されてきたとは言いがたい。著作集が刊行されれば、収録作品は格段にアクセスしやすくなる。多様な読解が展開してゆく発端になればうれしい。福沢や草創期慶應義塾の学問上、言論上の戦略を捉え直す好機会となるのではないかと期待している。日本そして諸国における近代研究にも貢献するはずである。

4月1日付で慶應義塾福沢研究センターの特任助教に着任しました。大学院で日本政治思想史を専攻し、自発的結社としての草創期慶應義塾、中でも小幡篤次郎に関心を寄せてきました。念願だった小幡の著作集の編纂に従事できることに心より感謝を申し上げます。

## 福沢諭吉協会・慶應義塾共同事業『小幡篤次郎著作集』の編纂について

西 沢 直 子

一般社団法人福沢諭吉協会（以下福沢協会）から、福沢美和氏の遺贈金を用い小幡篤次郎の著作集の刊行を計画しているというご相談があったのは、2018年4月のことであった。

福沢美和氏は、1947（昭和2）年に福沢諭吉の長男一太郎の長男八十吉氏の長子としてお生まれになった。エッセイストとして活躍され、『フロックスはわたしの目一盲導犬と歩んだ十二年』（文芸春秋、1994年）をはじめ多くの著作があり、講演会などを通じて盲導犬の普及に努められた。2015（平成27）年11月9日に亡くなられ、その遺産が学校法人慶應義塾（以下義塾）と福沢協会におよそ2対1の割合で寄贈されることになった。

福沢協会ではそのご寄付を、会員諸氏にとってはもちろん、広く社会に貢献できるような事業に使い、美和氏の遺徳をいかしたいと考え、理事会等で協議を重ねられた結果、小幡篤次郎の著作集の刊行を計画された。小幡は前掲住田孝太郎氏の「小幡篤次郎の人物像と著作の特徴」で紹介されているように、彼がいなければ現在評価されるような福沢諭吉の姿も、また義塾もなかったといっても過言ではない存在にも拘わらず、全集はおろか著作集もなく、伝記すらわずか5丁の『小幡篤次郎先生小伝 並小幡記念図書館沿革概要』があるのみである。彼の業績はあまりにも福沢と一体化してしまい、編纂の機会が失われてしまったといえよう。福沢協会としては、この機に彼の業績を集め、彼に対する研究が促進されれば、福沢研究もまた義塾史研究も、新たな局面を迎えることができると考え、この事業を同様に美和氏の遺贈金を受けた義塾と共同で行いたいということであった。

4月24日に行われた会合では、企画を具体化するために、まずは単行本となった著作から段階的に刊行することとし、福沢研究センターの協力を得て分量計算を行い、それに基づき企画書を作成することになった。その結果、単行本と解題、付録として年譜等を加え、四六判でおおよそ1500頁弱、1巻300頁程度で全5巻という構成案を作成し、それを基に、2018年10月30日に清家篤福沢協会理事長と長谷山彰塾長が会談された。義塾側は、企画にはおおむね賛成であるが、美和氏の遺贈金は独立運用することはできないという回答であった。

その後、計画は容易には進まなかった。福沢協会側は、美和氏の遺徳顕彰の意味も込めて、あくまでも義塾と福沢協会の間での共同事業としたい意向で、実務を福沢研究センターが担当するのはやむを得ないが、負担増になるのは本意ではなく、近代日本研究に寄与できる品質のものを作るためにも、新規の専門研究者の雇用は必

須であると主張された。

2019年になっても、なかなか進展をみなかったが、4月以降福沢協会から義塾に対し積極的な働きかけがあり、福沢協会の小室正紀常務理事、義塾の大石裕常任理事、福沢研究センターの井奥成彦所長を中心に会合が重ねられた。暮れに近くなって漸く合意に至り、義塾の総務部が基本合意書を、福沢研究センターが久我竜二事務長を中心に覚書を作成し、義塾側は1月31日常任理事会で稟議書が提案承認され、2月4日の福沢協会の理事会でも承認された。基本合意書は義塾長と福沢協会理事長間で、覚書は義塾側が大石常任理事、福沢協会側が小室常務理事、坂井達朗常務理事、寺崎修常務理事の連名で2月21日に締結された。

覚書では刊行委員会と、その下に編集業務を担当する編集委員会の設置が定められた。刊行委員には、福沢協会理事会の推薦で平石直昭理事、川崎勝理事、山内慶太理事が、慶應義塾からは大石常任理事、井奥福沢研究センター所長、池田幸弘経済学部長（福沢研究センター運営委員）が2月半ばまでに就任した。また刊行委員会の委員長は清家篤理事長に決定し、早速3月5日に第1回の刊行委員会が開催され、編集委員長として西沢が選任された。

第1回刊行委員会での話し合いを受けて、以下のような編集方針が定まった。まず単行本として刊行された著作はすべて収録し、各著作の解説は人文学系の専門家だけでなく、内容に応じ理系の専門家にも依頼し、小幡の業績を多角的に伝え、今後の小幡研究の土台となる著作集にすべく努力する。附録としては、典拠を明示した年譜の作成等を行う。

また福沢協会は美和氏の遺贈金から福沢研究センターに指定寄付し、それを人件費として特任の教員が雇用できることになった。3年有期であるので、編集期間は2020年4月から2023年3月までになる。一方義塾は出版に関わる費用を分担し、2021年度から年間1～2冊を刊行する。現行案では全5巻であるため、2024年3月まで（もしくは2025年3月まで）に完結する予定である。

三田キャンパス内西館に編集室が設けられたところでコロナ禍に見舞われ、現在は足踏み状態である。しかし小幡篤次郎が亡くなって115年が経過し、漸くその業績に目を当てられる時が来たのであるから、半年程度のことであきらめず、できる限り良質の著作集を届けるべく努力をしたい。編集委員の選任や事業の進捗状況については、順次『福沢研究センター通信』でお知らせする予定である。



## 福澤諭吉記念慶應義塾史展示館の 開設準備状況

横 山 寛

現在慶應義塾では慶應義塾史を紹介する常設展示施設として「福澤諭吉記念慶應義塾史展示館」の開設準備が進んでいる(2021年オープン予定)。慶應義塾では戦前から幾度かこのような施設を求める声はあったが実現することはなく、この度ようやく実現する。会場は三田キャンパスの図書館旧館2階である。図書館旧館は慶應義塾創立50周年記念図書館として明治45(1912)年に開館し、以来関東大震災や空襲の被害を受けながらも三田キャンパスの象徴的な建築として親しまれてきた。昭和57(1982)年に新図書館が開館してからも書庫、会議室、貴賓室、研究所として利用されており、平成29(2017)年からの大規模な耐震改修工事が昨年完了し、現在は展示室となる2階部分の内装工事を行っている。この度新たに開設される常設展示室はもともと大閲覧室、のちに大会議室として利用されてきたスペースで、その面積は約280㎡、隣室に設けられる企画展示室は約60㎡となっている。展示空間のデザインは楨総合計画事務所によって行われた。以下、常設展示室の準備状況について1. 展示資料とグラフィック、2. 再現模型、3. デジタルコンテンツの順で紹介したい。



常設展示室(完成イメージ)

### 1. 展示資料とグラフィック

常設展示室の中心となるのは実物資料と展示パネルのグラフィックである。展示は主に4つのエリア「颯々の章—福澤諭吉の出発—」/「智勇の章—文明の創造と学問の力—」/「独立自尊の章—私立の矜持と苦悩—」/「人間交際の章—男女・家族・義塾・社会—」で構成される。これに加えてイントロダクションの動画や慶應義塾の年表、図書館の歴史を紹介するエリアなども設けられている。

福澤諭吉や塾生などを模した一筆書きの線画により来館者を展示動線へ誘導するデザインが採用され、視覚的に楽しめるつくりとなっている。各章では解説文のほか、福沢・塾員の言葉や福沢・慶應義塾にまつわる各種のエピソードが日英両言語で散りばめられている。

颯々の章—福澤諭吉の出発—は福沢の誕生から適塾や欧米での見聞などその修業時代を中心に扱う章である。実物資料では父百助の遺品、福澤諭吉命名の由来「上諭条例」、オランダ語の辞書、西航手帳、サンフランシスコで撮影した写真館の少女との写真、アメリカで購入した乳母車などの展示を予定している。

智勇の章—文明の創造と学問の力—は慶應義塾の開塾から一貫教育の完成にいたる展開や、演説の創始、時事新報の創刊、著作権の確立、実業の奨励など福沢の後半生を扱う章である。実物資料では慶應義塾入社帳、ウェーランド経済書、『学問のすゝめ』初編初版、三田演説日記、門下生著作と版木などの展示を予定している。

独立自尊の章—私立の矜持と苦悩—は福沢の死後、医学部の創設、藤原工業大学の創立、太平洋戦争、創立100年、学生運動、SFC創設、共立薬科大学との合併など現代にいたるまでの慶應義塾の歩みを扱う章である。実物資料では早慶戦開始の挑戦状、三田派同人の原稿、藤原工業大学関係、学徒出陣関係、SFC開設時の資料などの展示を予定している。

人間交際の章—男女・家族・義塾・社会—は福沢の家族論や慶應義塾の学風・スポーツなどを扱う章である。実物資料では福沢が息子に与えた「ひゞのをしへ」、「日本婦人論」原稿、応援歌の楽譜、オリンピックメダルなどの展示を予定している。



常設展示室(完成イメージ)

## 2. 再現模型

常設展示室では展示資料として A) 大正期の三田キャンパス B) 日吉寄宿舍と旧制高校の寮の一室を対比した模型の2つを用意している。

### A) 大正期の三田キャンパス

大正12(1923)年の関東大震災以前の三田キャンパスを再現したもので、当時の三田は福沢諭吉生存時以来の校舎と図書館や大講堂などの煉瓦建築、最新の鉄筋コンクリート校舎が混在していた。模型は1:285の大きさで、作成にあたり、キャンパス全体や各校舎の図面、空中写真、各校舎の写真、絵葉書などをできる限り収集し、それらをもとに考証している。これらの建物のうち現存するのは演説館と図書館旧館のみである。

### B) 日吉寄宿舍と旧制高校の寮の一室

日吉寄宿舍は昭和12(1937)年に完成した谷口吉郎設計の学生寮で、1人1室、各部屋に洗面台を設けた、当時最先端の建築であった。現在は3棟のうち1棟が改修のうえ学生寮として使われており、1棟は年月による風化が激しいものの内装は建設当時の部分が残っている。そのため図面や写真に加え、現地調査を行って寸法等を確認したデータをもとに1:18の大きさの模型化をすすめている。また参考資料として、旧制高校の学生寮の一室を再現した模型もあわせて設置する。

## 3. デジタルコンテンツ

常設展会場には、A) 福澤諭吉世界を駆ける B) 言葉で戦う福澤諭吉 C) 近現代史の中の慶應義塾生 D) 社中 Who's Who の4つのタッチパネル型デジタルコンテンツが設けられ、日英両言語に対応した専用のアプリを使って写真や動画を閲覧することができる。A)～C)にはそれぞれ以下の3つのボタンが用意され、そこから写真・画像・解説またはデータベースにアクセスする仕様となっている。

### A) 福澤諭吉世界を駆ける

福澤諭吉が海外で訪れた場所／福澤諭吉の写真／福澤諭吉関連国内史跡

### B) 言葉で戦う福澤諭吉

福澤諭吉全著作／時事新報の広告／時事新報の漫画

### C) 近現代史の中の慶應義塾生

慶應義塾生の風俗と日常／イラストで見る慶應義塾生／慶應義塾関係戦没者データベース



### D) 社中 Who's Who

社中 Who's Who は福沢諭吉関連人物および塾員を中心とした慶應義塾関係者を紹介するデジタルコンテンツである。2つのタッチパネル型スクリーンに各人物の肖像アイコンが漂い、それに触れることでどのような人物か知ることができる仕組みになっている。また人物名、出身地、職業、慶應義塾在学時期などから任意の人物・グループを呼び出すことも可能である。収録人物は『福沢諭吉事典』『慶應義塾史事典』掲載者を基礎に500人程度とし、順次追加を予定している。また、人物とは別に動画再生機能も搭載されており、動画アイコンに触れることで「創立90年祭」などの映像を見ることができる。



最後に企画展示室は年に2回程度特別展を開催する予定で、初回は戊辰戦争時の福沢のウェーランド経済書講義に焦点を当てた企画展を想定し準備を進めている。



企画展示室 (完成イメージ)

## 小幡甚三郎のアメリカ留学を追いかけて

西 沢 直 子

小幡甚三郎の留学先であった Polytechnic Institute を 1 度訪ねてみたいと考えていた。念願がかない、大学より学事振興資金をうけて、2019年3月に初めて Poly Archives を訪れ、また本年3月には2回目の訪問を果たすことができた。

小幡甚三郎は、1864(元治元)年旧暦6月に、福沢諭吉が将来を嘱望し、同道して中津から連れて来た6名の若者のうちの1人である。アルファベットも覚束ない状態から、短期間で英語を習得し、2年後の1867年(慶応2年末)には「第三等」「英学教授手伝並」「五人扶持金二両」(翌年さらに「第二等」「英学教授手伝」「拾人扶持金五両」)で幕府開成所に雇用されるまでになった。日本最初といわれる英文熟語集をはじめ、単独訳共訳共編合わせて5種類の本を出版し、1872年(明治4年12月末)最後の中津藩主奥平昌邁に従いアメリカに留学した。しかし、1873年1月29日にわずか27歳で客死した。

筆者は福沢研究センターが刊行する『近代日本研究』第14巻(1997年)に、甚三郎がアメリカから出した3通の書簡、神経病院医師による容体書、留学先の学校長 David H. Cochran の書簡、兄妹に訃報を告げた兄篤次郎の書簡の計6点の資料を紹介した。また昨年の Poly Archives 訪問の際に、背に“PERMANENT RECORD”と書かれた成績簿を閲覧し、1871年から75年の間に日本人4名、江木高遠、柳本直太郎、佐藤百太郎、松田晋斎の成績を見出し(このうち柳本は越前福井出身で慶応2年に、松田は伊予松山の出身で慶応元年に、それぞれ慶應義塾に入学している)、その履修科目や、2005年に Jeffrey L. Rodengen 氏によってまとめられた Polytechnic Institute の150年史 *Polytechnic University Changing The World The first 150 years* から判明する Cochran の情報などを、福沢諭吉協会が発行する『福沢手帖』183号(2019年12月)で報告した。(185号に追記あり)

本年は、昨年の訪問時に Poly Archives の Archivist Lindsay Anderberg さんから勧められた、Brooklyn Historical Society へ行こうと再訪の計画をたてたが、各機関に閲覧の予約をとった後2月も半ばをすぎると、日本での新型コロナウイルスの感染拡大が大きな問題となったので、私はおそらく訪問不可になったという知らせが来るのではと考えていた。しかし Lindsay さんも、歴史協会の Mary Mann さんや公共図書館のスタッフの方々も快く迎えてくださり、有益な情報を探せるツールについても検討して下さった。

今回の訪問では、先の“PERMANENT RECORD”と、理事会の議事録(Minutes of meeting of Trustees of the Brooklyn college & Polytechnic Institute)をもう1度調査したいと考えていた。成績簿は、加除式ではなく科目が

印刷されたノートにも拘わらず、当時 Polytechnic Institute にあった2つの部門 Collegiate Department(上級4学年)と Academic Department(その下の4学年)の学生が混在しており、しかも成績の訂正はないが書き込みからは清書とも思えないので、資料の性格を判断するには、もう少し調査すべきであると考えた。また理事会の議事録はほとんどが資金の話ではあるが、時折たとえば、当該年も例年同様 Collegiate Department の3年目を終了すれば学位(diploma)を与えることを決定したというような報告が記載されているので、日本人学生に関する直接的な情報がなくても、学事については若干わかることが出てくるかもしれないと考えた。

いずれもまだ結論がでていないが、私はいつもあれこれ遅く時間が掛かる。今回 Lindsay さんは、過去の問い合わせファイルを確認してくれたようで、Polytechnic Institute が現在の New York University Tandon School になる前、まだ Polytechnic University だった2004年に、同大学の司書 Heather Walters さんと私との間のメールのやりとりを見つけ、15年も調査をしていることに驚いていた。私は計画的に進められず、思い出したように調査をしていることに恥じ入るばかりであった。

今回唯一といえる収穫は、小幡の Polytechnic Institute への入学日がわかったことである。1872年3月29日付 *The Brooklyn Union* の、“PERSONAL”という雑報記事の中に次の記述があった。ちょうど1871年度の最終学期が4月10日から始まる、その少し前3月28日の入学であった。

POLYTECHNIC. — Four Japanese youths entered the Polytechnic Institute, yesterday, as pupils. Their names are Okudaira, Takahi, Obata, and Sakahi

当時の新聞記事を検索していると、日本人学生に対する関心の高さを感じる。1872年12月21日付の *The Brooklyn Daily Eagle* には “There are 700 Japanese students in various schools and colleges in America.” とあって、日本人学生が急速に増えたことや、塩崎智氏が紹介されているように(「幕末維新在ブルックリン(NY州)日本人留学生関連資料集成及び考察(1)~(3)」『拓殖大学 語学研究』114、116、117号、2007年)、日本人留学生たちの熱心さと優秀さが、他国からの来訪者と比べて目を引いたのであろう。

甚三郎の心に思いを馳せると、周囲の優秀さが彼にとっては焦りとなったとも思う。1872年8月24日付の *The Brooklyn Union* は、“SCHOOL”と題した記事の中で、*the Liberal Christian* に掲載された the Brooklyn Polytechnic の日本人学生たちについての話の中から、前掲「Momotaro Sato」(佐藤百太郎)について書いてい

る。記事では、彼はまだたった1年しか学んでいないが、極めて流暢に英語で会話ができる。また態度も完璧に落ち着いていて、慎み深く、老若を問わず人びとを魅了していると称賛している。江木高遠も“PERMANENT RECORD”に抜群の成績を残しているの、甚三郎は、早く彼らに追いつきたいと願ったのであろう。

また *The Brooklyn Union* の同年12月16日の紙面には、“THE PICTURES”と題した記事で、地方の芸術家の作品の展示会に、the Polytechnic と the Packer の2つの学校の学生の絵が、両校で行われている the art work を見るよい機会として、出品が許されたことを告げ、適正な選考を通過し展示された作品が紹介されている。“Wolf’s Head.” という作品は日本人学生 Motoi Ikagawa (五十川

基)の作品で、非常に (excellently) よく描かれていると評されている。五十川は慶応元年に慶應義塾に入学しているの、小幡とも面識があったであろう。小幡ももう少し時間がたてば、机上だけでなく外に目を向ける余裕が生まれ、実り豊かな学生生活を送ることができたであろうと思うと、残念でならない。

(追記) 1989年に翻訳出版された『アメリカ企業200年』(文眞堂)の著者 Thomas C. Cochran 氏は、David H. Cochran の孫にあたり、小幡篤次郎が David H. Cochran にあてた書簡を所持していたようである。同氏はすでに1999年に亡くなっているが、書簡はまだどこかに保管されているかもしれない。

## 2019年度 新中津市学校との共同事業報告

前号の「主な動き」で紹介済みのように、令和元(2019)年8月3日、小幡篤次郎の生家跡に建てられていた中津市歴史民俗資料館は、中津市歴史博物館の設立に伴い閉館し、改修されて新中津市学校がスタートした。

新中津市学校は、1階の学習交流スペースと2階の集会室から成り、慶應義塾と共同で講演会やセミナー等を開催し、また研究活動を行うことが、その設置目的のひとつになっている。発足した新中津市学校の運営委員会には、運営委員として慶應義塾から渡部直樹常任理事、井奥成彦福沢研究センター所長、西沢直子同副所長が参加し、また定期的に双方の学芸員や所員によるワーキング部会を開催して、共同事業や研究活動を進めていくことになった。なお中津市には、福沢研究センターに勤務経験のある松岡李奈氏が学芸員(教育委員会)として着任し、現在は福沢研究センター客員所員も務めている。

2019年度に双方の協力で行った行事および研究は以下の通りである。

### 1. 連続市民講座 担当 西沢直子

- 第1回 2019年10月12日  
「中津市学校の新しき「智」の創生」
- 第2回 2019年11月9日  
「中津市学校をめぐる人びと  
—小幡篤次郎・甚三郎兄弟を中心に—」
- 第3回 2020年1月11日  
「中津市学校の役割  
—中津にとっての近代とは何か—」

### 2. 共同研究 中津市学校旧蔵洋書の調査

担当 松岡李奈学芸員(中津市)

中村亮福沢研究センター調査員・西沢直子

2019年8月8日～12日、10月10日～12日

### 3. 会議

#### 1) 運営委員会

6月26日 於中津市役所

3月16日 新型コロナウイルス感染拡大のため  
メール審議

#### 2) ワーキング部会

7月19日 於慶應義塾三田キャンパス南館

11月28・29日 同上

担当 三谷紘平学芸員 松岡李奈学芸員

井奥成彦所長 西沢直子

(文責：西沢)



小幡篤次郎  
甚三郎  
の生家跡・新中津市学校

## ❖ 主な動き

### 主な動き

#### ■ 図書館旧館改修工事の動き

福沢研究センター内の内装工事は2020年2月から3月にかけて実施された。この後塾史展示館の開館に向けての工事が開始される。センターが戻るのは夏を予定している。

#### ■ 塾史展示館

図書館旧館2階に開設する塾史展示室は、2019年12月に正式名称が福沢諭吉記念慶應義塾史展示館(Fukuzawa Yukichi Memorial Keio History Museum)と決まり、開設するための準備を進めた。開館は2020年10月の予定であったが、新型コロナウイルスの関係で調整中である。

※詳細は p.6～7 記載

#### ■ 小幡篤次郎著作集編集刊行事業

2020年2月に義塾と福沢諭吉協会との間において、小幡篤次郎著作集の編集・刊行を共同で行なうことへの合意書が締結され、4月から開始されることとなった。

※詳細は p.4～5 記載

#### ■ 顧問・所員の活動

以下に掲げる行事に顧問・所員の協力を得た。

小室名誉教授・センター顧問：

福沢諭吉記念第58回全国高等学校弁論大会審査員  
(中津文化会館)(2019年12月6日)

米山教授・センター所員：

通信教育部入学説明会で講演  
「福沢諭吉にとって慶應義塾とは？」(12月7日)

末木教諭・センター所員：

尾崎罌堂記念館近代史講演会  
「福沢諭吉と政治―議員、選挙をどう見ていたか―」  
(2020年1月18日)

山内教授・センター所員：

福沢諭吉先生120回忌法要時記念講演会  
「福沢諭吉と北里柴三郎―二人を貫く独立の気力―」  
(2月3日)

#### ■ 国際交流

新型コロナウイルスの関係で春休みの交流はできなくなったが、2020年1月30日～2月6日に韓国梨花女子大学大学院史学科より研修生4名を受入れた。

#### ■ 慶應大阪シティキャンパス(KOCC)におけるセンター講座

第31号に詳細を掲載したセンター講座は、第1回は2019年12月7日(土)西沢教授により開催、第3回は2020年2月8日(土)宮本又郎大阪大学名誉教授に代わり、平野恭平神戸大学准教授により開催された。第2回と第4回は新型コロナウイルスなどの関係もあり延期として2020年度に繰り越された。



2019年12月7日(土) 西沢教授  
「明治初期福沢諭吉の洋学校支援と慶應義塾分校  
―旧「智」から新「智」へ―」



2020年2月8日(土) 平野恭平神戸大学准教授  
「武藤山治―『独立自尊』を実践し、紡績王国を築いた企業家―」

#### ■ 『近代日本研究』の刊行

2020年2月29日に第36巻を刊行した。特集として「近代日本と留学」を組んだ。

#### ■ 展覧会への協力

下記の企画展に資料を貸し出した。

2019年12月7日～2020年1月26日

豊川市桜ヶ丘ミュージアム

「三河ではじめての中学校 宝飯中学校」

2020年1月18日～3月1日

中津市歴史博物館 後援 慶應義塾

「時を拓く、時代を創る。黒田官兵衛 福沢諭吉」

## ■ 諸会議

- \* 小泉基金運営委員会 (10月4日)
- \* 2019年度執行委員会 (10月18日、11月14日、2月26日、3月31日)
- \* 2019年度第2回運営委員会 (11月6日)
- \* 『慶應義塾150年史資料集』第3巻編集委員会 (11月14日、1月21日)
- \* 2019年度第2回福沢研究センター会議 (1月23日)
- \* 小幡事業第1回刊行委員会 (3月5日)
- \* 2019年度第3回運営委員会 (3月6日)

## ■ 人事

- |       |    |             |         |
|-------|----|-------------|---------|
| <所員>  | 退職 | 宮内環         | ～3月31日  |
| <事務局> | 退任 | 酒井明夫(事務長)   | ～10月31日 |
|       | 新任 | 久我竜二(事務長)   | 11月1日～  |
|       | 新任 | 渋谷彩佳(事務嘱託)  | 10月1日～  |
|       | 退職 | 平本起世美(派遣職員) | ～2月7日   |
|       | 新任 | 岩田有紀子(派遣職員) | 2月18日～  |

## ■ 主な来往

- 聞き取り調査には(聞)を付す。
- \* NHK「ネーミングバラエティー 日本人のおなまえっ!」取材対応 (10月4日)
  - \* 平沼泰三氏、平沼亮三関係資料寄贈、借用のため来訪 (10月9日)
  - \* 中津三田会幹事長池部正紀氏来訪 (10月9日、11月12日)
  - \* 柳井和臣氏、講義と資料寄贈のため来訪 (10月15日)
  - \* 立教大学師岡淳也氏、資料閲覧のため日吉来訪 (10月17日)
  - \* NHK「歴史秘話ヒストリア」取材対応 (10月17日、12月12日、1月21日、2月3～4日、3月26日)
  - \* 河石達雄氏来訪(聞) (10月28日)
  - \* 中津市長奥塚正典氏来訪 (10月29日)
  - \* 上智大学史資料室堀和孝氏、資料閲覧のため来訪 (10月29日、1月20日、2月20日)
  - \* 黒黄会上野美昭氏来訪 (10月30日)
  - \* NHK 記者取材対応 (11月11日、1月23日)
  - \* 法政大学笹川ゼミ来訪 (11月11日)
  - \* 東京芸術大学橋本久美子氏来訪 (11月12日、1月23日)
  - \* 井筒次郎氏、資料寄贈のため来訪 (11月18日)
  - \* 仁木勇夫氏、資料寄贈のため来訪 (11月21日)
  - \* Mrs. Heather Mackinnon Humphries (E. B. Clarke 氏の孫)、学内見学と資料見学のため来訪 (11月26日)
  - \* 有泉學氏、資料寄贈のため来訪 (11月26日)
  - \* 東京芸術大学美術館古田亮氏来訪 (11月29日)
  - \* TBS 報道部取材対応 (12月3日)
  - \* クリスチャン・ガラン氏来訪 (12月3日)
  - \* 小倉光氏資料寄贈のため来訪 (12月12日)
  - \* 渡洋二郎氏来訪 (12月20日)
  - \* 石坂ゼミ OB 梶井英二氏他来訪 (1月20日)
  - \* 東京三田倶楽部来訪 (1月28日)
  - \* 慶熙大学国際交流チーム李今花氏来訪 (1月28日)
  - \* 商工学校 OB 豊田保雄氏、清水興一氏、水野要氏、星野明氏来訪 (2月6日)(聞)
  - \* 客員所員田中康雄氏、資料持参のため来訪 (2月7日)
  - \* 一橋いしぶみの会来訪、都倉対応 (2月20日)

## ■ 出張・見学

- \* 都倉、資料調査のため三重津市の渡辺家訪問 (10月4～6日)
- \* 西沢、東北大学図書館、仙台市博物館を訪問 (10月9日)
- \* 竹屋、全国大学史資料協議会総会出席のため、立教大学訪問 (10月16日、18日)
- \* 都倉、秩父宮ラグビー場にて出陣学徒追悼式出席 (10月21日)
- \* 都倉、東慶寺にて釈宗演没後百年法要出席 (10月27日)
- \* 都倉、書道会100年記念座談会出席 (10月28日)
- \* 都倉、渋谷区・聖輪寺にて「水泳部の母」吉田千代を偲ぶ会出席 (10月29日)
- \* 竹屋、図書館総合展出席 (11月12日)
- \* 西沢、中国訪問 (11月18日北京社会科学院・北京理工大学、

19日天津南開大学)

- \* 西沢、韓国訪問 (11月20日ソウル大学、21日梨花女子大学、22日高麗大学)
- \* 久我、全史料協関東部会303回定例研究会出席 (1月24日)
- \* 都倉、港区文化財保護審議会出席のため港区立郷土歴史館 (1月28日)
- \* 都倉、資料調査のため芝共立キャンパス訪問 (2月25日)
- \* 西沢、土田信吾氏より寄贈資料受取のため鷹の台訪問 (2月25日)
- \* 西沢、久我、資料受け渡しのため銀座和光訪問 (2月25日)
- \* 西沢、ニューヨークブルックリン公共図書館、ブルックリン歴史協会、ニューヨーク大学タンドンスクールボーリィアークイブスを調査のため訪問 (2月28日～3月3日)
- \* 西沢、拓殖大学訪問 (3月12日)

## ■ 講師派遣・学会発表

- \* 都倉、中津・福沢記念館特別展ギャラリートーク:「福沢論吉とスポーツ」(10月20日)
- \* 平野、日本経営史学会で報告:「創成期百貨店の慶應義塾出身経営者たち」(10月26日)
- \* 都倉、経営史学会第55回全国大会統一論題報告:「慶應義塾出身者はなぜ「群れる」のか」(10月26日)
- \* 西沢、経営史学会第55回全国大会で報告:「戦前期日本の私学経営と人材供給機能―慶應義塾を事例として」(10月27日)
- \* 西沢、2019年度龍谷史学会大会で講演:「福沢論吉の近代社会構想―家族論の視点から―」(11月1日)
- \* 都倉、日吉キャンパス公開講座で講義:「天皇制の「出口戦略」―福沢論吉・小泉信三が描いた「立憲君主」の未来―」(11月2日)
- \* 西沢、たにしの会(旧中津藩土族の会)で講演 (11月3日)
- \* 都倉、慶應パトリック倶楽部100周年記念式典で講演:「慶應義塾史上のパトリック倶楽部」(11月9日)
- \* 柄越、「万来会」(昭和19年三田会)で講演、都倉出席 (11月11日)
- \* 都倉、慶應義塾全国議員連盟総会で講演:「福沢論吉と『帝室論』」(11月15日)
- \* 西沢、経営管理研究科特別講義「福沢論吉に学ぶ」:「女性と家族をめぐる諸問題」(11月16日)
- \* 西沢、中国南開大学で講義:「福沢論吉の近代社会論―女性論・家族論を中心に―」(11月19日)
- \* 都倉、国分寺三田会 Oh!Enka の会で講演:「皇太子の先生になった人 小泉信三」(12月15日)
- \* 西沢、第185回福沢先生誕生記念会講演:「認め合う社会―福沢論吉の女性論・家族論に学ぶ」(1月10日)
- \* 都倉、京都慶應倶楽部90周年記念式典で祝辞・記念誌に寄稿:「京都慶應倶楽部発会とそれ以前」(1月10日)
- \* 西沢、東京雑学大学で講演:「小幡甚三郎のアメリカ留学―明治初期就学生のジェンダー的苦悩」(2月6日)
- \* 都倉急病のため、大阪シティキャンパス講座(1月11日)、芦屋三田会(1月19日)、姫路慶應倶楽部(1月25日)の講演予定をキャンセル

## ■ その他

- \* 塾史展示館業者との打合せ (10月10日、11月27日、12月4日、12月11日、12月13日、12月18日、12月25日、1月24日、1月29日、2月5日、2月19日、3月5日、3月6日、3月11日、3月16日、3月18日、3月19日、3月25日)
- \* 塾史展示館ワーキンググループ (10月17日)
- \* 竹越与三郎についての研究会 (10月24日、2月4日)
- \* 井奥、第1回ミュージアムコモンズ評議会 (11月27日)
- \* 都倉、SFC 学部説明会 (12月6日)
- \* 美術品管理運用委員会 (12月12日)
- \* 西沢、国際センターフェアウェルレセプション参加 (2月18日)
- \* 所員宮内環氏、最終講義 (3月7日)

※原則として主な動きに掲載したものは除く

